

## 市民社会を強くする——トークセッションのすすめ

早稲田大学社会科学総合学術院教授 NPO 法人市民がつくる政策調査会代表理事 坪郷 實

市民がつくる政策調査会の2014年総会が開催された3月20日に、新しい企画として「トークセッション——市民社会を強くする」を開催した。トークセッションは、オープンな雰囲気の中で、異なる視点を持つ論者や多様な立場のメンバーがそれぞれの意見に対して相互に討論をする場である。今回は、この間、民主主義、市民参加、代表制、憲法、自治、等々について問題提起を行い、具体的な市民活動を展開してきた4人の方を迎え、市民社会を強くするために、何が重要なのか、どのような発想、どのような行動が必要なのか、自由に討論していただいた。興味ある論点が多くあったが、私なりに整理していくつか紹介しつつ、市民社会を強くするために必要なことを若干述べたい。

第一の論点は、代表制と直接民主主義の一つである住民投票をめぐる議論である。水口和恵さん(小平都市計画道路に住民の意思を反映させる会共同代表)は、小平市における「都市計画道路3・2・8号府中所沢線」に関する住民投票実施の直接請求を行い、条例が制定され住民投票が実施されたが、小平市議会で住民投票のための条例が可決された後に市長の提案で成立要件(投票率50%)が追加され、2013年5月26日の住民投票は不成立となったこと、投票用紙の公開を求めて訴訟を行っていることが述べられた。大変興味深い市民活動の事例である。

これを受けて、杉田敦さん(法政大学教授)は、直接デモクラシーの動きが必要であり、具体的な実践を積み重ねることが重要であると指摘した。辻元清美さん(衆議院議員)は、市民の政治力を高め、市民派の議員を増やすことが重要であると述べた。三木由希子さん(情報公開クリアリングハウス理事長)は、住民投票は一つの手段であり、反対のみならず、別の土俵を作ることが必要であると主張した。

住民投票は、市民による「アクセルとブレーキ」と言われるように、市長や議会が取り上げない課題について市民が提起するアクセルの機能と、市長や議会の意見と異なる意見を市民が提起するブレーキの機能を持つ。代表制と、住民投票をはじめとする直接デモクラシーとは共に、デモクラシーに必要な要素である。

第二の論点は、特定秘密保護法をめぐる議論である。三木さんは、国家秘密保護法をめぐる議論や動きを紹介しながら、反対にとどまらず、自分たちで設定する別の土俵が必要であり、「開かれた政府」を作るとい

目標を持つことの重要性について述べた。さらに「政府の法案や法律に反対する私たち自身が多様性を失っていないだろうか?」と問い、上記の目的を達成するために、共通の目的をもっている多様な人たちが如何に連携するかが重要であることを提起している。

これを受けて、杉田さんは、自由民主主義体制が「自由」と「民主」の側面があること、「自由」が権力批判を意味し、「民主」が自分たちが「透明性のあるよりましな政府を作る」ことを意味すること、そのための実践の積み重ねが大切であると、述べた。辻元さんは、「権力の市民化」がポイントであり、「政治の質」を変える政党、自分たちの権力としての政府を作ることが重要であることを述べた。水口さんは、情報は市民のものであることを強調した。

代表制や憲法に関して、杉田さんは、選挙のみに焦点を当てる代表制は狭い考えで、住民投票は一つの代表制であり、デモクラシーの市民参加の方法が多元化していること、都知事選挙を含めて、選挙では経済が主要な争点になり、「脱原発」という単一争点を焦点化することが難しいこと、憲法は「権力が暴走しないよう抑制」をするものであることを述べた。

関連して、辻元さんは、橋下大阪市長の辞任・再選挙の動きについて述べ、ボトムアップ型で、市民の間にコンセンサスを作ることこそが必要であり、自治のまちづくりが要であると主張している。

最後に、水口さんは「トークが何より重要である」ことを指摘し、杉田さんは狭い議論を脱して、実践をしながら、それを伝えていくことが重要であることを述べた。三木さんはどういう社会を作るかのビジョンを示し、自分たちが多様性を持つことにより、合意点、一致点を見出していくことが重要と述べ、辻元さんは、今回のトークのキーワードは「実践と情報公開」だったと指摘した。

この間、市民がつくる政策調査会が意識してきたことは、できる限り、これまでお互いに一緒に討論をしなかった組織を含めて、多様な意見を持った人たちが対話や討論をする場を作り、討論を通じて新しい論点を見つけ、さらに問題解決を目指すことである。市民社会を強くするためには、多様な意見が相互に議論される場づくりと、トークを通じて論争文化を作っていくことが重要であると思う。

(つぼごうみのる)